ティーチング・ステートメント

所属　北海道科学大学保健医療学部看護学科
名前　上村浩太
作成日　2024.3.12

【責任】
保健医療学部看護学科に所属し、専門科目である小児看護学を中心とした教育・研究活動を行っている。教育活動は、小児看護学領域に関連する科目（小児看護学概論、小児看護学援助論、小児看護学援助論演習、小児看護学援助技術論演習、小児看護学実習）の責任者、ゼミ生の卒業研究支援、入試関連業務などである。次年度からは４年生の担任を務める。

【理念】
少子化が進むなか、学生が子どもたちや親たちの生活や生きた声に接する機会が少なくなっている。まず学生には、様々な健康レベルにある子どもとその親への関心や興味をもってほしい。
小児看護の場は小児専門病棟・外来だけではなく、少数ではあるが整形外科、耳鼻科など多様な診療科や在宅の場で小児看護が必要となる。小児看護の経験が少ない状況でも小児看護を展開することになることがあるため、学生のうちに様々な健康レベルにある子どもとその親の特性や権利の擁護を学んでほしい。そして、子どもとその親の特性に応じて、子どもと親へ人間としての敬意を払い方、子どもが主体となるように子どもの最善の利益を考えた具体的な看護の方法を学んでほしい。学ぶ過程で、医療従事者となる高い倫理観も培われると考える。
小児は、成人や高齢者などと同じ人間であるため、基本的な解剖生理学は同じ部分がある。多領域の知識を小児看護の知識と結びつけることで、学びを深めてほしい。結果として、国家試験合格率が上がったり、卒業後に小児看護が実践できると考える。

【方針・方法】
上記の理念を実現するために、5つの方針を取り入れ、以下のような方法を展開している。

方針１　子ども・親の特性や権利、および看護を知る機会を多様に作る

1) 事前に簡単な課題に取り組ませ、小児への関心を高める。
2) 小児の特性と看護を知る機会を作るため、実例を多く示す。
3) 子どもの権利を擁護できなかったり、モヤっとしたり、うまくいかなかった体験事例を示す。
4) 視覚的情報が有効なため、動画を取り入れる。
5) 当事者のインタビュー動画を授業に取り入れる。
6) 教科書をベースに教材は作るが、教科書の出版社によって、書かれていないことは追加する。
7) 技術論の演習では、事前に演習内容の手順書作成の課題に取り組み、演習中の体験やフィードバックを通して、手順書を修正していくプロセスを踏むように構成する。
8) 疾患と看護では、簡略化した事例に対しての疾患や治療の概要、その看護方法について調べるようグループで課題に取り組み、発表、質疑応答、フィードバック、補足説明を通して、学びが深まるように構成する。
9) 実習先は、医療施設だけに偏らないように、幼稚園と保育園、児童相談所も組み込み、様々な健康レベルにある子どもを知る機会を作る。

方針２　学びを深めるため振り返る機会を作る

1) 授業の終わりに、授業での学び、感想と質問を書くようにし、内省する機会を作る。
2) 質問は次回以降に説明を追加する。
3) 学生が、授業内容に基づき、国家試験形式の問題を作る課題に取り組み、それを評価点として設計する。
4) 実習では学生の体験を重視し、子どもの置かれている状況や権利擁護やコミュニケーションの仕方、子どもとの関わりの困難さなどをアウトプットさせ、フィードバックすることで、学びが深まるように構成する。

方針３ 小児看護実習先の安定的な確保

1) 実習先とのコミュニケーションをとり、かつ調整をし、問題を未然に防ぐ。
2) 実習先の指導者の技術を承認する。I（アイ）メッセージなどのコーチング技術を用いる。

方針４ 小児看護における国家試験対策

1) 学生が、授業内容に基づき、国家試験形式の問題を作る課題に取り組み、それを評価点として設計する。
2) Web 上で、いつでも、どこでも、何度でも、問題を解く・解説をみる機会を作る予定。
3) 教科書をベースに講義を展開するが、教科書の出版社によって書かれていないことがあり、しかし国家試験出題基準となっている項目は追加する。
4) 多領域での学び、特に解剖生理学や薬理学について繰り返し説明したり、小児看護の知識と繋ぎ合わせることで、学びを深まるように構成する。

方針５ 倫理観に関連する不正行為の防止

1) 事前課題やレポートでの web や生成 AI からの完全コピーなどの不正行為が起こらないように、ガイダンスで注意喚起する。
2) 試験監督では不正を未然に防ぐよう、他の監督員との連携や巡回を意識する。

【成果・評価】

- 授業後の感想や学びの中に、「イメージできた」「わかりやすかった」といったと回答している。
- 授業評価アンケートで、7割以上の学生が肯定的評価や興味関心の高まったと回答している。ただ、回収率が３割と低いのが課題である。
- 実習で、言語に頼らないコミュニケーションや権利擁護について、学生がカンファレンスで取り上げ、臨床からの肯定的評価を得ている。

【目標】

＜短期目標＞

- 授業評価アンケート回収率を上げるよう周知した上で、子どもとその家族への関心・興味の項目が高まる。（2024 年 12 月）
- 発表やレポートにルーブリックを取り入れる。（2024 年 12 月）
- Web 上で、いつでも、どこでも、何度でも、問題を解く・解説をみる機会を作る（2025 年４月）
- 小児看護実習の安定的な確保に向けて、実習内容に、小児救急電話相談の音声データから展開していく方法を組み立てる。（2026 年８月）

＜長期目標＞

卒業後の学生が、小児看護の経験が少ない中でも、授業・実習を思い出し、基本的な小児看護が実践できる。